子どもの放課後の居場所選択における体験と意識

― 保護者へのインタビュー調査から ―

鷹山　紗季*

A Study on Parent's Experiences and Awareness in Choosing Schoolchild Care Facilities:

From an Interview Survey with Parents

Saki TAKAYAMA

Abstract

The purpose of this study was to clarify the actual experiences and awareness of parents in the process of choosing an after-school placement for their children. To this end, interviews were conducted with 19 parents in the cities of Kawasaki and Kamakura in Kanagawa Prefecture. The results showed that the experiences and awareness of the 19 parents during the selection process were different and varied. One difference between Kawasaki City and Kamakura City is that in the narratives of parents in Kawasaki City, words such as "impatience" and "pressure" were found, but not in Kamakura City, indicating that parents in Kawasaki City share the awareness that they must start thinking about after-school placement at an earlier stage than those in Kamakura City. It is clear that the number of students who have been in the program for more than a year has been increasing.

Keywords: afterschool, schoolchild care facilities, parent, choice

1　問題と目的

「男女共同参画白書　令和 3 年版」によると、共働き世帯は 1980 年以降増加し、特に 2012 年から急速に増加している(厚生労働省 2021：110)。そのため、子どもの放課後の居場所は必要不可欠となっている。学童保育の登録児童数及びクラブ数は、図 1 に示したように、年々増加傾向にある。未だに多く存在している待機児童対策のため、政府は、2015 年に施行した「放課後子ども総合プラン」を延長したかたちで 2018 年に「新・放課後子ども総合プラン」を施行し、2023 年度末に合計 30 万人の受け皿を確保することを目標にしている。具体的には、厚生労働省による「放課後児童健全育成事業」と文部科学省による「放課後子ども教室推進事業」の一体化や連携をはかり、小学校施設の活用を推進させている。加えて、民間企業の委託や参入を積極的に受け入れているため、民間の学童保育は増加している(厚生労働省

キーワード：放課後、学童保育、放課後児童クラブ、居場所、親、選択

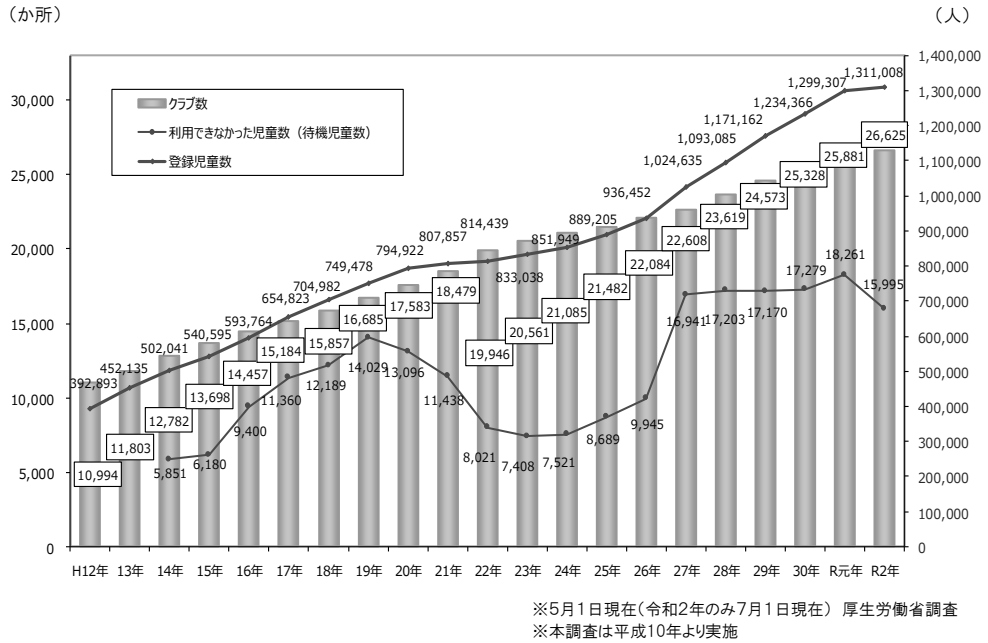
* お茶の水女子大学大学院博士前期課程 2021 年度修了

2015：7，2020：10）。また、現在、学童保育の運営主体は、大きく、公設公営、公設民営、民設民営に分けられ、設置場所も学校施設内外や駅近等、多様化している。

保育所を選択する過程は、「保活」という言葉で世間では着目されている。「保活」を経験した保護者は、自動的に子どもの就学時に放課後の子どもの居場所を選択する必要がある。それにもかかわらず、学童保育を選択する過程については、ほとんど着目されていない。子どもの放課後の居場所に関して、保護者への質問紙調査は実施されているが、それらは、その時点で通っている施設に対する満足度や、ニーズを尋ねるものであり（西地・宮林・鷲尾 2012；猿渡 2017；林 2018；速水 2018）、子どもの放課後の居場所を選択する過程に焦点を当てた研究はほとんどないのが現状である。

そこで、本研究では、子どもの放課後の居場所を選択する過程における、保護者の体験と意識の実態を明らかにすることを目的とする。すなわち、選択にかかわる保護者の体験と意識を明らかにすることは、今後の保護者支援に繋がるものであると考えられる。従来なされてきたような、全体的な傾向を捉えることも重要であるが、インタビュー調査を通して、保護者 1 人 1 人の具体的な体験を明らかにする点に本研究の意義がある。

本研究における、子どもとは、小学生児童を意味し、子どもの放課後の居場所とは、学童保育、放課後子ども教室、アフタースクール等の放課後に子どもが居る場所の総称を意味する。放課後の居場所という言葉を用いた理由は、以下に 2 つある。1 つ目に、本研究では、仕事をしながら子育てをする保護者が、学童保育だけでなく、放課後子ども教室なども使うことを前提としているためである。2 つ目に、近年増加している民間の学童保育の中には、学童保育と名乗ってはいるものの、実際の内容は塾や習い事に近いものがあるため、学童保育としてまとめることができなかったためである。また、居場所の言葉の意味は、「居る場所」という意味の他に、「安心していられる場所」という意味があるが、本研究では、前者の意味として使用している（久保田・谷脇・徳川・林・前田・松井・渡辺 2007）。



【出典】厚生労働省，2020

図 1：全国の学童保育数、登録児童数及び待機児童数の推移

2　研究方法

2. 1　調査対象

本研究でのインタビュー対象者は、神奈川県の鎌倉市あるいは川崎市に在住しており、学童保育や放課後子ども教室、アフタースクール等に子どもを現在通わせている、または 2 年以内に通わせていた保護者の合計 19 名である。全員が母親であり、職業形態はフルタイムがほとんどであった。また、祖父母と同居している家庭はおらず、1 人親家庭は対象者に含まれなかった。

2. 2　川崎市と鎌倉市の放課後の居場所

川崎市が実施している放課後事業である「わくわくプラザ事業」は、川崎市の市役所によると、放課後子ども教室にみえるが、学童保育も兼ねた一体型のものとして実施しているとのことであった。しかしながら、実際は、全児童を受け入れており、部屋が 1 つであることや、おやつも基本的にはないことなどから、学童保育よりも放課後子ども教室に近いと考えられる。一方で、鎌倉市が実施している放課後事業の「放課後かまくらっ子」は、学童保育的機能の「子どもの家」と、放課後子ども教室（アフタースクール）的機能の「子どもひろば」で、内容が異なり、部屋も分かれて実施されているという違いがある。また、川崎市の小学校在学児童数は 2021 年 5 月 1 日時点において、74,141 人であり（川崎市 2021）、鎌倉市の小学校在学児童数は 2021 年 7 月 8 日時点において、7,713 人であることから（鎌倉市 2021）、川崎市の小学校在籍児童数は鎌倉市の約 10 倍であるといえる。放課後の居場所の数も、鎌倉市は公設の学童保育が 16 箇所、民間の学童保育が 9 箇所の合計 25 箇所であるのに対して、川崎市は公設の学童保育が 114 箇所、民間の学童保育が 42 箇所の合計 156 箇所で、川崎市の施設数は鎌倉市の 6 倍程度である[1]。

このような放課後の施設の在り方が異なる中で、保護者の選択過程にどのような相違点や共通点があるのかをみていく。

2. 3　調査の手続きと調査内容

本調査では、川崎市あるいは鎌倉市の放課後施設に子どもを通わせている、ないしは通わせたことのある以下の 19 名の保護者を対象に、2021 年 7 月～10 月に個別インタビューを 1 時間程度行なった。インタビュー対象者については、スノーボール・サンプリング法によって抽出し、調査への協力を得た。

インタビュー方法については、新型コロナウイルス（COVID-19）感染症対策のために基本的にオンラインミーティングツールを利用した[2]。調査対象者のうち対面を希望した方とは、対象者の希望に合わせたファミリーレストランや喫茶店で行なった。研究の概要と個人情報の保護に関する事項を明記した承諾書については、オンラインでのインタビューの際は、インタビュー実施日までに、あらかじめ調査者が先に署名した承諾書 2 通と切手を貼った返信用封筒を調査協力者に送付し、うち 1 通を署名し返送してもらう形をとった。対面での場合は、インタビューを開始するにあたって、その場で読んでもらい署名してもらった。また、基本属性に関しては、子どもの学年、家族の構成、保護者の方の職業、職業形態、平日の帰宅時間、現在子どもが通っている放課後施設、通う頻度、通い始めた時期、就学前に通っていた場所、習い事の有無と通う頻度について、インタビュー実施日までにメール等で送付した「事前質問表」にて回答してもらった。インタビュー開始の際は、承諾書を読み上げ、再度確認してもらった。また、対象者に許可を取った上で、オンラインではレコーディング、対面では IC レコーダーに録音し、後日文書化して整理した。なお、本調査はお茶の水女子大学人文社会科学研究の倫理審査委員会の承認を得ている（受付番号 2021-130）。本調査では半構造化インタビューの形式をとった。基本的には順番通りに質問をしていったが、インタビュー対象者の回答や状況に合わせて、質問事項に新たな質問を加えることもあった。かつインタビュー対象者の自由な応答も記録するような方法で実施した。インタビューガイドの内容は、学童保育に入る前に関することを 13 項目、学童保育に入ってからに関することを 5 項目、合計 18 項目について質問した。

表 2-1　インタビュー対象者一覧（川崎市）

	小学生の子どもの学年	自身の年齢	職業	職業形態	平日の帰宅時刻	利用している放課後施設と頻度	就学前に利用した場所	習い事の有無と頻度
KW1	3 年生	40 代	小学校教員	フルタイム時短勤務	18:30	わくわくプラザ(移動待機場所として) 民間学童保育（週 2）	保育所	有（4 つ） 各週 1～月 3 回
KW2	3 年生	30 代	小学校教員	フルタイム	19:30	わくわくプラザ(移動待機場所として) 民間学童保育（週 4）	保育所	有（2 つ） 各週 1
KW3	1 年生・3 年生	40 代	公務員	フルタイム	18:00	わくわくプラザ(3 年生：週 1) 民間学童保育（1 年生：週 5、3 年生：週 1）	保育所	有 3 年生：週 4
KW4	1 年生・5 年生	40 代	会社員	フルタイム	19:00	民間学童保育（1 年生：週 5、5 年生：週 1）	保育所	有 1 年生：3 つ（週 1）、5 年生：塾（週 3）と習い事 3 つ（週 1）
KW5	2 年生・5 年生	40 代	会社員	フルタイム	18:00～18:30	わくわくプラザ（週 4） 民間学童保育（週 1）	保育所	有（2 つ） 各週 1
KW6	3 年生 5 年生＊現在は、3 年生のみ放課後施設利用	40 代	会社員	フルタイム	19:00	わくわくプラザ(移動待機場所として) 民間学童保育（週 2）	保育所	有 3 年生：塾（週 2）と習い事 1 つ（週 1）、5 年生：塾（週 3）
KW7	1 年生・4 年生	40 代	会社員	フルタイム→在宅勤務	19:00	わくわくプラザ（週 2） 民間学童保育（週 3）	保育所	有 週 1
KW8	1 年生	40 代	会社員	フルタイム →時短勤務、在宅勤務	18:00～19:00	わくわくプラザ（週 3）	保育所	有（4 つ） 各週 1
KW9	1 年生	30 代	地方公務員	フルタイム	18:30	わくわくプラザ（週 2） 民間学童保育（週 3）	保育所	有（4 つ） 各週 1
KW10	1 年生	40 代	会社員	フルタイム →在宅勤務	18:00	わくわくプラザ（週 2） 民間学童保育（週 3）	保育所	有 塾（週 2）と習い事 3 つ（各週 1）
KW11	1 年生	40 代	契約研究員	フルタイム	18:30	わくわくプラザ（週 2） 民間学童保育（週 2） 祖父母宅（週 1、週末）	保育所	有 塾（週 2）と習い事 2 つ（週 3）

表 2-2　インタビュー対象者一覧（鎌倉市）

	小学生の子どもの学年	自身の年齢	職業	職業形態	平日の帰宅時刻	利用している放課後施設と頻度（過去に利用した施設）	就学前に利用した場所	習い事の有無と頻度
KM1	3 年生・5 年生	40 代	保育士	フルタイム	18:00	民間学童保育（週 1） （子どもひろば）	保育所	有 3 年生・5 年生：塾（週 1）と習い事（週 1）
KM2	5 年生	40 代	会社員	フルタイム	19:30	民間学童保育（週 3）	保育所	有 塾（週 2）と習い事（週 2～3）
KM3	3 年生	40 代	民間学童保育のスタッフ	パートタイム	19:00	子どもの家(週 3) 民間学童保育（週 1）	幼稚園	有 塾（週 2）と習い事（週 1）
KM4	5 年生	50 代	幼稚園教諭	フルタイム	18:00～19:00	民間学童保育（週 1） （子どもの家）	保育所	有 （週 1）
KM5	1 年生・5 年生	40 代	教員	フルタイム	18:00	子どもの家(1 年生：週 5) 民間学童保育（5 年生：不定期）	保育所	有 1 年生：習い事 2 つ（各週 1）、5 年生：塾（週 2）と習い事 2 つ（各週 1～2）
KM6	1 年生・5 年生	40 代	病院の事務員	パートタイム	18:00	子どもひろば（1 年生：週 3～4）	幼稚園職場併設の保育所 ＊二重保育	有 1 年生：習い事 1 つ（各週 1）、5 年生：（週 5）
KM7	1 年生・4 年生	40 代	会社員	出勤：時短勤務 在宅ワーク：フルタイム	18:30	公設公営の学童保育（週 5）＊横浜市	保育所	有 1 年生：習い事 1 つ（週 1）、4 年生：習い事 3 つ（各週 1）
KM8	4 年生・6 年生	40 代	民間学童保育のスタッフ	フルタイム	19:15～19:30	（幼稚園併設の延長保育施設） 子どもの家	幼稚園	有 4 年生：習い事 3 つ（各週 1）、6 年生：習い事 2 つ（各週 1）

2. 4　分析方法

保護者 1 人 1 人の体験や意識の実態を明らかにするために、インタビュー資料を読み込み、複数の人が用いた言葉や、類似している箇所をまとめてパターンを見出し、意味づけを行なった（竹家 2021：91）。分析にあたっては、1 人 1 人の語りを丁寧にみていくことを心がけた。

3　結果

3. 1　川崎市と鎌倉市の保護者でみられた相違点

インタビューでは、「いつ頃から放課後の居場所について考え始めましたか。そのきっかけ等があれば教えてください」という質問を行なった。その結果、放課後の居場所について考え始めたきっかけが、「他の保護者からの情報提供」が、鎌倉市では 1 名だったのに対し（KM4）、川崎市では 8 名と比較的多かった（KW1、KW3、KW4、KW6、KW7、KW8、KW10、KW11）。例えば、川崎市の保護者からは、以下のような回答が得られた。（以下、下線部は筆者による）

> 年少に上がる頃から考え始めました。きっかけとしては、きょうだい関係のいるおうちの人（娘と同じ学年に通わせていて、上にお子さんがいるご家庭）、友達から、「年中までに学童って決めるんだよ」ということを聞きまして、「そうなんだ」という驚きとともに焦りもあり。（KW1）

> 気にし始めたのは、年中の頃だったと思います。きっかけは、同じ保育園のお母さんの知り合いから、「早くから予約をしないと、予約は取れないらしいよ」と聞いたことがきっかけですね。特別に行動には起こさなかったんですけれども、ああ、考えなくちゃいけないんだなって、そういうプレッシャーが生まれ始めたのがこの時ですかね。（KW7）

このように、川崎市において、他の保護者による情報提供がきっかけと答えた保護者の中では、「焦り」「驚き」「びっくり」「プレッシャー」という言葉が語りの中でみられた。このような回答は、他にもみられた（KW6）。一方で、このような言葉は、鎌倉市ではみられなかった。このことから、川崎市は、鎌倉市に比べて、放課後の居場所について、早期から考え始め行動しなければならないという意識が、保護者間で共有されていることが明らかになった。考えられる理由としては、川崎市では、児童数に対して放課後の居場所が不足しており、倍率が高くなっていることが考えられる。また、就学時に確実に利用できるような仕組みである「予約生」や「プレ生」などとして入会することを推奨していることが多い民間の放課後の居場所が、鎌倉市よりも多いことがあげられる。

3. 2　情報収集の方法

インタビューでは、「学童保育/放課後子ども教室/アフタースクール等ついての情報はいつ・どのように得ましたか」という質問を行なった。

その結果、情報収集の方法としては、放課後の居場所について考え始めたきっかけと同様に、他の保護者の情報提供から情報収集を行う保護者が比較的多かった（KW1、KW2、KW3、KW4、KW5、KW6、KW8、KW9、KW10、KW11、KM2、KM3、KM5、KM6、KM7、KM8）。例えば、以下のような回答がみられた。

> 第一子ママ友はみんな不安で分からないっていうところですね。先輩ママからみんなどうしてるのっていうのを情報収集はしていました。（KW5）

ネットに書いてあることよりも先輩ママさんの、上にお兄さんお姉さんがいて行ってるっていう人の話の方が、信憑性もあったので、そこが大きかったなと思います。(KW10)

このように、他の保護者、特に放課後の居場所選択を経験した保護者による情報を重視した保護者が多いことがわかった。他には、インターネットを利用した保護者（KW1、KW5、KW6、KW7、KW9、KW10、KW11、KM1、KM2、KM5、KM6、KM7）、以前から家の近くや通勤路にあるということを認識していた場合、実際に現地に行って、貼ってあるポスターを見に行ったり、置いてあるチラシなどをもらいに行ったという保護者や（KW6、KW9）、保育所に置いてある、区が発行している子育て情報誌や（KW1）、保育所や小学校の説明会でもらったチラシから情報を収集した保護者がいた（KM1、KM4、KM6）。他の保護者による情報提供と併用したり、複数の方法で情報を収集していることがわかった。

3. 3　選択する上で重視したこと

インタビューでは、「学童保育/放課後子ども教室/アフタースクール等を選択するうえで、重視したことはありますか。あった場合、どのようなことを重視しましたか」という質問を行なった。

その結果、川崎市、鎌倉市ともに、「家や職場との距離が近い」ことが最も多く回答された（KW2、KW3、KW4、KW5、KW6、KW7、KW8、KW9、KW11、KM4、KM5、KM6、KM8）。具体的には、以下のような語りがみられた。

一番は、距離。迎えに行きやすいか、そこにロスが起きないかっていうところが一番あって。ギリギリなんで、会社出て子どもをピックアップして家に帰ってご飯作るっていう。(KW6)

このように、仕事が終わり、子どもを迎えにいった後に家で食事を作ることなどに大変さを感じており、少しでも早く家に帰れるようにしたいという語りがみられた。保育所の選択過程に着目した先行研究のアンケート調査において最も重視されたことと同じであったことからも、子どもの預け先が家や職場に近いことは、仕事と育児を両立するために重要であることがわかった。さらに、「習い事ができる」ことを重視した回答が得られた（KW2、KW5、KW6、KW7、KW8、KM2、KM5、KM7）。具体的には、以下のような語りがみられた。

要は共働きだから、低学年のうちって子どもが1人で歩いて習い事とか行かせるのもちょっと怖かったから、ちゃんと習い事も通えるような、インプットとか、体験みたいなのを学童でやってもらえると、一石三鳥くらいだなって思っていたので(KW6)

習い事だったり、いろんな経験をしてほしいなと思ってまして、（中略）とにかく有意義な放課後を過ごせる学童ってどこかないかなっていうので悩んでましたね。やっぱり、習い事させたくても自分で送迎してあげられないので、そういったところで悩んでいましたね。（KM2）

このように、学童保育等内で習い事ができれば、移動がないため安全であり、保護者が迎えに行く必要がないこと、休日などに行かせずに済むことなどが理由として語られた。その他に、放課後の時間を遊んで過ごすだけではなく何かを身に付ける時間と捉え、有意義に有効的に使って欲しいと考えている保護者がいることがわかった。このような保護者の考えがある理由の 1 つとしては、民間の放課後の居場所が、付加価値として提供している習い事の宣伝が影響を与えている可能性も考えられる。その他には、「預かり時間、延長保育がある、融通がきくこと」（KW3、KW5、KW6、KW8、KW11、KM3、KM4、KM7）、「イベントが豊富」（KW3、KW4、KW5、KW9、KW10、KM5）、「費用」（KW3、KW5、

KW7、KM6、KM7、KM8）、「送迎がある」（KW2、KW6、KW7、KW9、KW10）、「施設や場所の雰囲気」（KW11、KM1、KM2、KM5、KM7）、「スタッフや支援員の雰囲気」（KW5、KW7、KM1、KM5）、「子どもが行きたいかどうか」（KW1、KW2、KW10、KM5）、「子どもが安心して過ごせるかどうか」（KW1）、「子どもに合うかどうか」（KW1、KW2、KW5、KM5）、「おやつがあること」（KW1、KW3、KM3、KM7）、「学校内にあるため、移動がなく安全であること」（KW5、KM3、KM6）、「学級閉鎖・学校閉鎖の時にも預かってくれる」（KW1、KW3）、「保護者の運営ではないこと」（KW3、KM3）、「子どもと同じ保育園の友達と一緒であること」（KW4、KW5）、「体を使って遊べるスペースがあること」（KW8）、「外遊びができる環境があること」（KM2）、「入所時に保護者にメールなどの連絡が届くこと」（KM3）などがあげられた。川崎市のみで得られた回答としては、「小学校外の施設であること」があげられ（KW1、KW3、KW4）、鎌倉市のみで得られた回答としては、「少人数」があげられた(KM1、KM2、KM5)。

3. 4　悩みや不安

インタビューでは、「現在、お子さんが通われている学童保育/放課後子ども教室/アフタースクール等に決めるにあたって悩んだりしましたか。どのようなことを悩みましたか」という質問を行なった。

その結果、悩みとしては、なかったという回答の他に（KW2、KW3、KW4、KM8）、以下のような回答が得られた。

> 保育園は、朝から夕方、わたしが迎えにいくまで同じ場所、同じ先生と過ごせる安心感があったんですけれども、学校に入学と同時に、学校もわくわくプラザも、そして民間学童もという居場所が、転々とすることへの不安は大きかったです。環境の変化がとても大きいことに関しては、一番不安でした。居場所が増えちゃうことによって、子どもの疲れやすさじゃないけど、負担になっちゃわないかな～というのは、一番、通わせる前は不安だったですね。（KW1）

このように、新しい環境が増えることで子どもにとって負担にならないかということで悩んだという語りがみられた。他にもこのような回答はみられた（KW5）。そして、他の保護者との繋がりがなく、話を聞く機会がなかったことで悩んだという回答や(KM1)、放課後の居場所の選択肢が意外と少なかったこと（KW1）、反対に、多かったために悩んだという回答もあった(KW7)。また、インタビューでは、「学童保育/放課後子ども教室/アフタースクール等に子どもを通わせる上で不安などはありましたか。あった場合、どのような不安がありましたか。小学校入学という大きな節目に加えて、放課後の時間も新しい環境で過ごすことになりますが、その点において何か困ったことなどはありましたか」という質問を行なった。

その結果、不安としては、なかったと答える保護者もいた一方で（KW3、KW6）、川崎市と鎌倉市両方で、小学校から放課後の居場所まで 1 人で移動できるかどうかや、安全に通えるかどうかが、比較的多く回答された（KW4、KW9、KM1、KM5、KM6、KM7、KM8）。具体的には、以下のような語りがみられた。

> 最初ちょっと、不安だったのは、１人で移動できるのかなって、（中略）自力で行かないと行けないから大丈夫かなって思ったり。（KW4）

また、新しく出会う友達とうまくやっていけるかどうか、学童保育に子どもが馴染めるかどうかで不安だったという回答も得られた（KW2、KW4、KW7、KW8、KM1）。さらに、保育所の先生とのような連絡の取り合いがあるかどうか、学校生活との両立がうまくできるかどうかといった不安があったという回

答や(KW5)、支援員やスタッフが、子どものことをよくみてくれるかということで不安があったという語りがあった（KM2、KM4）。お迎え場所が、学童保育等と兄弟姉妹の下の子どもが通う保育所の 2 箇所に増えることに対して、保護者自身が新しい生活に対して不安があったという回答もみられた（KW6）。

3. 5　選択過程における子どもとの会話

インタビューでは、「学童保育/放課後子ども教室/アフタースクール等を選択する際、お子さんとはどのような会話をしましたか」という質問を行なった。

その結果、以下のような回答が得られた。

> 保育園も暗くなるまで預かってたので、そういう感じで保育園の延長みたいな感じで、学校の後に行って欲しいんだっていう話はしてました。本当に多分学校というもののイメージがまだついていない中だったので、そういうもんなんだあって最初は言ってくれましたね。（KW5）

このように、小学校にいった後に行って欲しい場所として説明をしたという回答は他にもみられた（KW1）。また、見学や体験に行った場合は、その後に行けそうかどうかを確認したという回答が得られた（KW9、KW10、KM3、KM5、KM8）。他には、以下のような回答が得られた。

> 一応、その先輩ママさんのお子さんというのが同じ保育園のお子さんだったので、○○ちゃんってしってる？2 歳上の○○ちゃん行ってるところなんだよ～、○○ちゃんもこういう風に行ってるよとか、あと、場所はここだよとか。（KW3）

このように、子どもと仲のいい友達や、知っている子どもの名前をあげて、一緒に行くことを伝えたという回答もあった。このような回答は、他にもみられた（KW4、KW11、KM5）。また、習い事をする民間の放課後の居場所に関しては、「習い事に行く」ことに焦点を当てて、子どもに声かけをしたという回答もあった（KW2）。他には、保護者がなぜその場所を選んだのかについての思いや考えを全て話したという回答もあった。

> 考えていることとかは、まだ小さかったですけれども全部伝えました。（中略）どこまで理解していたかはわからないですけど、（放課後の居場所が）2つあることに対して前向きにむしろ、2つ目があるということを喜んでいました。（KM4）

このような回答は他にもみられた（KM2）。さらに、子ども自身に行きたいところを決めてもらったという回答もあった。

> 年中の時なので、学童というものがどういうものかという説明をした上で、一応最初にフリーで、どういうところがいいみたいな、何ができるところがいいみたいなのは一旦まず聞いてみた記憶があって、こっちがここでいいんじゃないとかって言うよりも、そこで何したい、どういう場所だったら嬉しいみたいなことを上の子の時は聞きましたね。まあ、年中だから、みんなと遊べればいいとか、そんな感じでしたね、じゃあ一番楽しそうなところを一緒に選ぼうみたいな。一応、写真とか見せて、4 個くらい候補があった時に写真を見せたりとか、特徴を話して聞かせる（中略）自分で決めたっていう感覚を、持っといてもらえたほうがいいなと思って。親にあそこに行けって言われ

たから行くとかじゃなくて、自分がそこに行きたいから行くっていうふうに作っておいた方が、楽しめるんじゃないかなと思って、子どもも。（KW6）

このように、自分で決めたという感覚がある方が、楽しく通えるという考えから、自分で子どもに候補の写真や特徴を通して希望を聞いたという語りが得られた。また、特に会話はせずに、決まってから伝えたという回答もあった（KW7、KW8、KM7）。

4　考察と今後の課題

本研究では、子どもの放課後の居場所を選択する過程において、川崎市と鎌倉市の保護者はどのような体験をし、どのような意識を持っているのかについて検討を行なった。

その結果、川崎市と鎌倉市の保護者の相違点として、川崎市の保護者は鎌倉市の保護者に比べて、早期から子どもの放課後の居場所について考え始め、体験の予約をするなどの行動をしなければならないという意識が強いことがわかった。理由としては、川崎市では、児童数に対して放課後の居場所が不足しており、倍率が高くなっているということや、就学時に確実に利用できるような仕組みである「予約生」や「プレ生」などとして入会することを推奨していることが多い民間の放課後の居場所が鎌倉市よりも多いことが考えられる。

「情報収集の方法」に関しては、信憑性があるという理由から、他の保護者、特に放課後の居場所選択を経験した保護者から情報を収集している保護者が比較的多かった。このことから、放課後の居場所選択の過程において、保護者の同士の繋がりが重要であるといえよう。

「選択する上で重視したこと」に関しては、「家や職場との距離が近い」ことが最も多く回答され、仕事をしながら子育てをする保護者の大変さが語られた。限りある時間を効率よく使えるように努力している保護者の姿がみられた。また、「習い事ができる」ことも重視した保護者が比較的多く、放課後の預け場所の中で習い事もできるということで、送迎をする必要がなくなることや、子ども 1 人での移動がない安全性などが考えられていた。このことは、「悩みや不安」とも共通してみられたことであり、新しい環境が一度に多く増えることが子どもにとって負担ではないか、新しい環境に馴染めるかどうかということに加えて、安全に通えるかどうかといったことも、親の不安として大きいことが明らかになった。

「選択過程における子どもとの会話」としては、放課後の居場所について子どもに説明する際には、「保育所と同じような場所」「小学校が終わった後に行く場所」などの説明や、見学や体験をした場合は反応や感想を確認したという回答が得られた。そして、仲良しの子どもがいることなどを伝えた保護者が比較的多いことがわかった。また、保護者がなぜその場所を選んだのかについての思いや考えを全て話したという保護者や、候補の中から子ども自身に選んでもらったという保護者、子どもには何も伝えず、保護者だけで決めたという保護者もおり、放課後の居場所選択への子どもの参加は、各保護者によってさまざまであったが、どの保護者にも共通していたものは、子どもにとって放課後の居場所が「行きたい場所」になってほしいという思いがみられた。

本調査における今後の課題としては調査対象者の偏りがあげられる。全員が母親であったこと、また、民間の放課後の居場所を利用していたり、習い事も多く子どもにさせていることから、社会関係資本や文化資本がある家庭が比較的多かったことに加えて、ひとり親家庭や、生活保護世帯が含まれていない。さらに、保護者の所得については聞いていないため、所得による選択過程における違いなどが見出すことができなかった。したがって、今後の課題としては、父親を含めて、サンプル数を増やし、さまざまな形態の家庭を含むこと、さらに保護者の所得の違い等を反映させることがあげられる。また、本調査では放課後等デイサービスは、放課後の居場所に含んでおらず、障害をもつ子どもと保護者の放課後については触れられていないため、すべての児童の放課後についても考えていきたい。

註

[1] 2021 年 5 月に、公設については、鎌倉市の「放課後かまくらっ子（放課後子ども総合プラン）について　放課後かまくらっ子　施設一覧」と、川崎市の「わくわくプラザの運営状況について　わくわくプラザ一覧」において公表されているもので調査を行ない、民間については、筆者によるウェブサイトのキーワード検索（民間、放課後児童クラブ、学童保育）で調査を行なった。

[2] 新型コロナウイルス（COVID-19）とは、2019 年 12 月に中国人民共和国湖北省武漢市において確認された新型のウイルスであり、日本では、2020 年 1 月に最初の感染者が確認された。世界保健機関（WHO）は、世界的な感染拡大を状況において、2020 年 3 月に「パンデミック（世界的な大流行）」とみなせると表明した。オンラインミーティングツールは、「Zoom ミーティング」を使用した。

参考文献

鎌倉市, 「放課後かまくらっ子（放課後子ども総合プラン）について」, (2021 年 5 月 5 日取得, https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/seisyo/kamakurakko2020.html).

———, 「よくある質問　市立の小・中学校の児童・生徒数、クラス数を知りたい。」(2022 年 3 月 3 日取得, https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/qa/kyouiku/kyouiku0004.html).

川崎市, 「わくわくプラザの運営状況について」, (2021 年 12 月 10 日取得, https://www.city.kawasaki.jp/450/page/0000040575.html).

川崎市教育委員会, 「令和 3 年度市立学校統計調査結果（速報値）　1 市立学校・学級・児童生徒数全市集計表　令和 3 年 5 月 1 日現在」, (2022 年 3 月 3 日取得, https://www.city.kawasaki.jp/880/cmsfiles/contents/0000077/77425/p1zensisyukei.pdf).

厚生労働省, 2015, 「平成 27 年 放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）の実施状況　（5 月 1 日現在）」, (2021 年 10 月 1 日取得, https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11906000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Ikuseikankyouka/0000107411.pdf).

————, 2020, 「令和 2 年（2020 年）　放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）の実施状況　（令和 2 年（2020 年）7 月 1 日現在）」, （2021 年 10 月 1 日取得, https://www.mhlw.go.jp/content/11921000/000708397.pdf).

————, 2021,「男女共同参画白書　令和 3 年版」, (2022 年 3 月 3 日取得, https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r03/zentai/pdf/r03_print.pdf).

猿渡智衛, 2017, 「地域における子どもの放課後の居場所づくりに関する基礎調査II―神奈川県における保護者への意識調査結果をもとに―」『弘前大学大学院地域社会研究科年報』13: 93-112.

児童福祉法(昭和二十二年十二月十二日)(法律第百六十四号), (2021 年 12 月 1 日取得, https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=322AC0000000164).

竹家一美, 2021, 『日本の男性不妊−当事者夫婦の語りから−』晃洋書房.

内閣府, 「子ども・子育て支援新制度　制度の概要等」, (2021 年 5 月 12 日取得, https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/outline/index.html).

久保田淳・谷脇理史・徳川宗賢・林大・前田富祺・松井栄一・渡辺実, 2007, 『日本国語大辞典 第 2 版』 小学館.

西地令子・宮林郁子・鷲尾昌一, 2012, 「学童保育に通う児童のソーシャルサポートと保護者への心理的影響」『島根大学医学部紀要』35： 9-21.

林香織, 2018, 「保護者にとっての学童クラブの在り方－保護者の意識調査結果ら－」 『江戸川大学紀要』28: 217-229.

速水聖子, 2018, 「地域の子育て支援における学童保育の役割と可能性: 学童保育利用保護者アンケートの分析より」『やまぐち地域社会研究』15: 29-44.